

国際看護

—外国人看護師との協働に対する 学生の思いの変化

著者:小櫻 愛美

所属:広島国際大学看護学部看護学科
(西川ゼミ)

目次

- I はじめに
- II 研究方法
- III 結果
- IV 考察
- V 結論
- VI 引用文献

I はじめに

- ・日本では経済連携協定により、インドネシアとフィリピンから外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れを実施している。
- ・これまでに両国併せて累計で892人が入国している(厚生労働省, 2012)。
- ・候補者の看護師国家試験合格者数は年々増加傾向にあり、より多くの日本人看護師が共に働くことがあると予測される。

- ・堀田ら(2008)によると、外国人看護師との協働において、国際化に伴う多民族・多文化共生社会の認識を深め、異文化看護の実践が必要不可欠であるということが明らかとなっている。
- ・看護学生を対象とした外国人看護師との協働に関する研究は稀少である。
- ・国際看護論実習の目的は、医療施設における外国人患者に対する看護の必要性、保険制度や医療通訳などの医療施設や地域のサポートシステムについて理解することである。

目的

- 国際看護論実習の目的より、先行研究で必要であると明らかとなった異文化看護の実践が経験できる実習である。
- 本研究の目的は、看護学生の国際看護論実習での経験が、協働への希望や不安の変化の要因となっているか明らかにすることである。

Ⅱ. 研究方法

調査対象

- ・調査対象は、H大学の国際看護論実習履修者33名のうち筆者自身を除いた32名である。
- ・国際看護論実習履修者とは、3年次に異文化間コミュニケーション論1単位、4年次に国際看護論を2単位履修している者である。
- ・実習前後ともに回収された対象者の調査票を有効回答とし、有効回答を得られた25名(78.1%)を本研究の分析対象とした。

調査期間

- 実習前の調査を2012年4月28日に実施.
実習後の調査は対象者の実習終了直後から1週間以内に実施した.
- 調査期間は2012年4月28日から2012年8月24日である.

調査方法・調査内容

- ・調査は自記式調査票を配布した.

- ・調査票

外国人看護師受け入れに関する研究(堀田ら, 2008)の調査項目を参考

外国人看護師と働くことに対する自由記述を追加.

- ・倫理的配慮

調査は無記名で参加は個人の自由であり成績に全く関係ないこと, また調査内容は統計処理され個人が特定されることはなく, 本研究のみに使用することを文章によって説明した.

分析方法

- 調査項目のうち、選択式回答は統計ソフトJMP 10.0 Microsoft Excelで分析を行った。
- 検定はWilcoxonの符号符順位和検定を使用した。
- 自由記述はText Mining Studio4.1を使用し、単語頻度解析による分析を行った。

Ⅲ 結果

1. 実習病院・実習内容について
2. 分析対象者
3. 外国人看護師との協働に対する希望と
その理由
4. 外国人看護師との協働に対する不安と
その理由
5. 外国人看護師との協働における
自己の課題とその理由

1. 実習病院・実習内容について

A病院

- ・国際内科があり，来院される方は英語を話される方が多く，インド人も多い。
- ・病院内にはレディースボランティアが多言語で対応している。
- ・スタッフの中にも英語が堪能な方が多い。
- ・実習内容は，国際内科での診察や検査室の見学，シスター，栄養部や薬局，事務部やコールセンター，病棟看護師の方から話を聞いたなどである。

B病院

- ・病院の周囲に中国残留孤児の方とその家族が多く住んでいる。残留孤児の方は、中国で育ったため、日本語での会話が困難である方や、中国の文化で生活をしている方も多い。
- ・ボランティアの医療通訳士の方が訪問している。
- ・中国からの看護師を受け入れている病院でもある。
- ・実習内容は、外来に来院される残留孤児の方の診察を見学し、医療通訳士の方や中国から来られた看護師の方と話を聞いた。また中国人医師の診察を見学した。

2. 分析対象者

- ・男子学生が5人(20%), 女子学生が20人(80%) .
- ・年齢は21~33歳(中央値21歳).
- ・実習病院はA病院が11人(44%), B病院が14人(56%).

- ・異文化間コミュニケーション論履修は有りが20人(80%), 5人(20%)が無し.

- ・異文化交流経験は有りが13人(54%), 11人(46%)が無し.

- ・異文化交流の内容は, 国際看護の海外研修に行った. ホームステイや海外旅行の経験がある, 外国人の友人がいるなどがあった.

- ・国際看護論実習期間中に外国人看護師・患者と関わる機会是有りが23人(92%)で, 2人(8%)が無かった.

- ・関わりの内容

A病院:レディースボランティアと共に入院される外国人患者を病棟まで案内した. 健診部での外国人患者への問診, 外国人患者と看護師との関わり, 国際内科での問診や医師と外国人患者との関わりを見学したなど.

B病院:中国残留孤児の方と医療通訳士を介してコミュニケーションを取り, 診察を見学した. 中国人医師に話を伺い, その医師の診察を見学した. また中国から来られた看護師方に話を伺ったなど.

3. 外国人看護師との協働に対する希望と その理由

- ・外国人看護師との協働の希望
 - ・働きたい・どちらかといえば働きたい
実習前17人(68%), 実習後23人(92%)
 - ・どちらかといえば働きたくない・働きたくない
実習前は8人(32%), 実習後が2人(8%)

A病院で実習を行った9人(81.8%)が実習前後で変化無し.
B病院で実習を行った9人(60%)に実習前後で変化有り.

・外国人看護師との協働の希望の理由

・働きたい・どちらかといえば働きたい理由

- ・異文化理解につながるが最も多い.
- ・外国の看護技術を学ぶことが出来る・外国人患者に外国語で対応できるは実習前後ほとんど同じ.

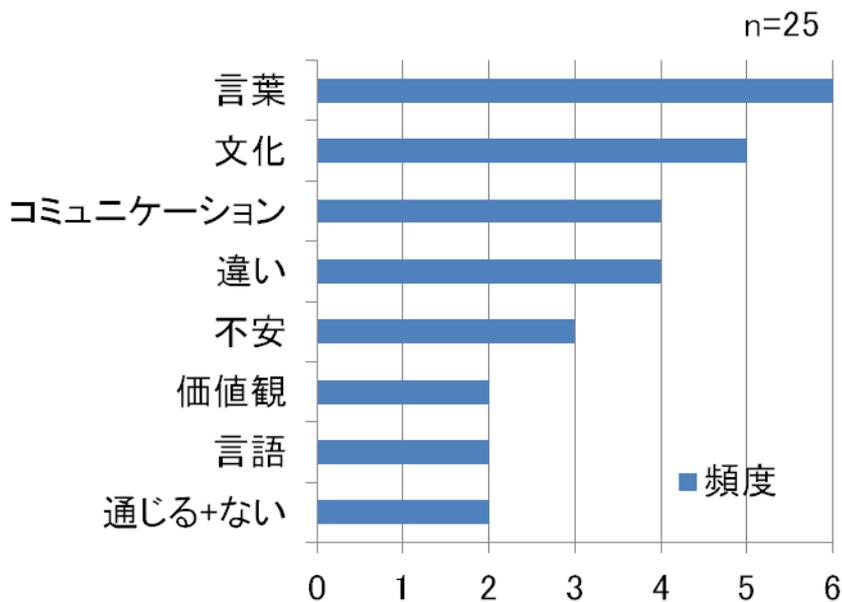
・どちらかといえば働きたくない・働きたくない理由

- ・緊急時の対応が困難であるが最も多い
- ・患者とのコミュニケーションが困難・日本での受け入れ体制が不十分であるは実習前後でほとんど同じ.

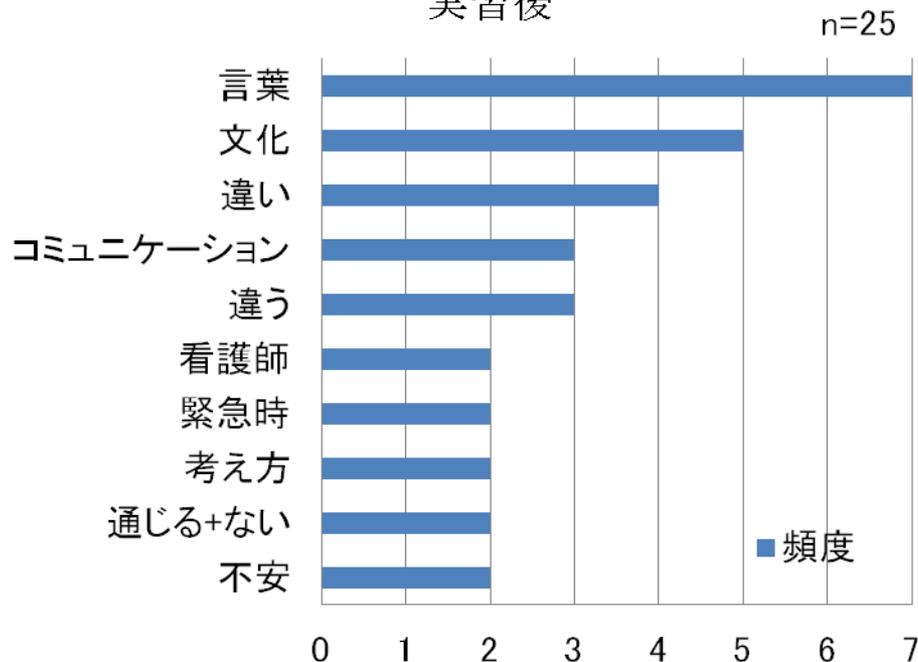
単語頻度解析

- ・実習前後共に「言葉」が多く、「通じる+ない」も見られており、言葉が通じないことに対して不安.
- ・「文化」「違い」という言葉も見られ、不安の一つに文化の違いもある.
- ・実習後には「看護師」「緊急時」という言葉もある.

実習前



実習後



4. 外国人看護師との協働に対する不安と その理由

- 不安の程度

 - 実習前: 10~100%(中央値50%)

 - 実習後: 5~80%(中央値40%)

- Wilcoxonの符号符順位和検定による分析

 - 実習の前後で不安の程度に有意差有り($p < 0.05$).

- 不安の理由はText MiningStudio 4.1 を使用し分析.

- 基本情報

 - 実習前: 総行数14, 平均行長(文字数)16.8, 総文数16,
平均文長(文字数)14.7, 述べ単語数75, 単語種別数48.

 - 実習後: 総行数14, 平均行長(文字数)20, 総文数22,
平均文長(文字数)12.7, 延べ単語数99, 単語種別数72.

5. 外国人看護師との協働における

自己の課題とその理由

- ・自己の課題の有無

実習前: 25人(100%)が有る

実習後: 有るが23人(92%), 2人(8%)が無い

- ・自己の課題の理由はText Mining Studio 4.1を使用し分析

- ・基本情報

実習前: 総行数14, 平均行長(文字数)13.5, 総文数15,
平均文長12.6, 延べ単語数64, 単語種別数49

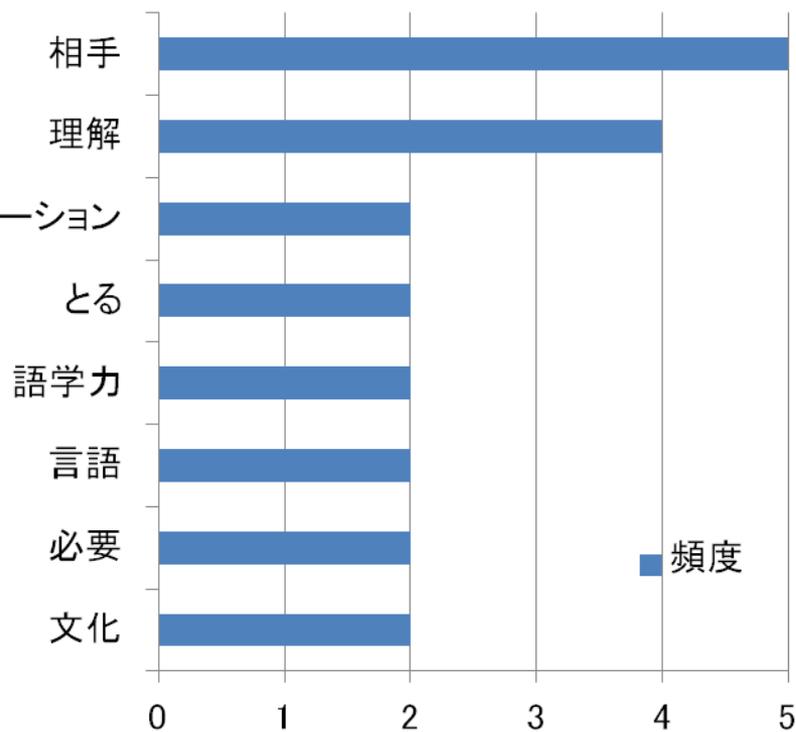
実習後: 総行数14, 平均行長(文字数)18, 総文数23,
平均文長11, 延べ単語数99, 単語種別数67

実習後は実習前と比較し, 文章量が増加.

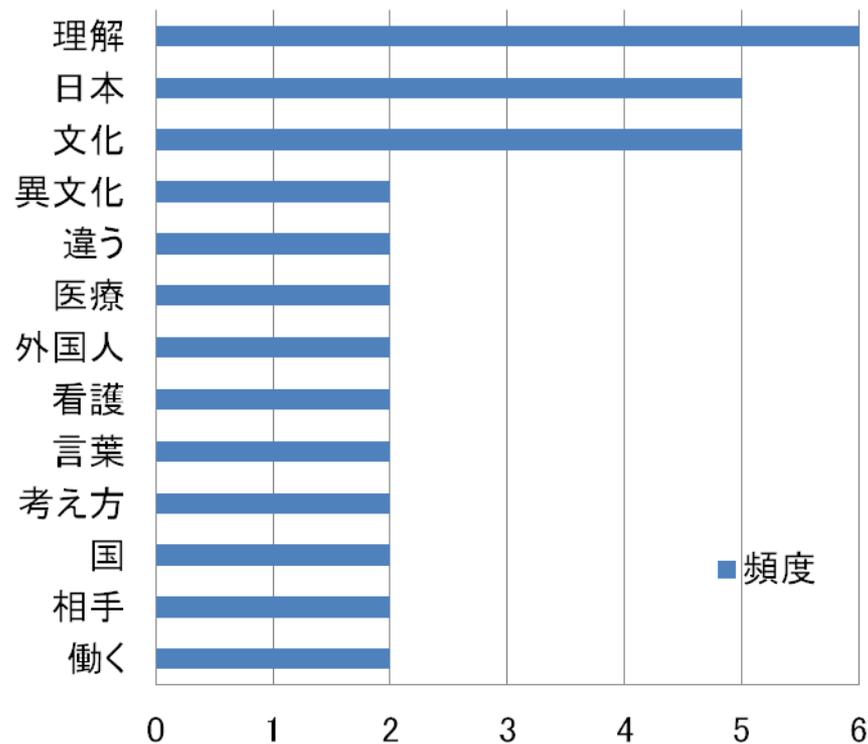
単語頻度解析

- ・実習前後ともに「理解」が多い。
- ・実習前は「相手」、実習後は「文化」を理解することが必要であるという意見が反映されているといえる。

実習前 n=25



実習後 n=25



IV 考察

1. 外国人看護師との協働に対する希望と
その理由
2. 外国人看護師との協働に対する不安と
その理由
3. 外国人看護師との協働における
自己の課題とその理由

1. 外国人看護師との協働に対する希望と その理由

- 今回の調査では実習前後において有意差なし
- 働きたい・どちらかといえば働きたいがの割合が増加
→外国人看護師との協働に対して抵抗が軽減された.
- 実習病院による希望の変化の割合の相異
→外国人看護師と関わる機会がA病院は無かったためと推測される.
- 外国人看護師との協働に対する希望は,
外国人看護師実際に関わることで変化すると考えられる.

・働きたい・どちらかといえば働きたいと回答した理由

- ・異文化理解に繋がるが実習前後共に最も多い。
 - 研究対象者は外国人看護師と協働から、異文化を理解できると考えていると推測。
- ・看護師不足を解消できるは実習前後共に少ない。
 - 古川ら(2012)は、外国人看護師の受け入れ目的は、国際交流や国への政策への協力の側面が強いと述べている。
 - ⇒実習前後共に回答数が少なかったと考えられる。

・働きたくない・どちらかといえば働きたくない理由

- ・緊急時の対応が困難である

コミュニケーションが困難であるが比較的多い。

→古川ら(2012)によると, 1年経過した現在も看護業務遂行に必要なレベルの語学修得が困難である。
言葉が大きな問題となっている。

- ・実習後には減少している。

- ・B病院の中国出身の看護師は, 外来の看護師として働き, 一人で患者に対応していた。

→協働において言葉が大きな問題とはならないと考えたため。

2. 外国人看護師との協働に対する不安と その理由

- ・不安の程度が実習前と比較し、実習後に軽減。
→実習での何らかの経験が不安の軽減に繋がった。
実習での経験
→不安が増加・軽減した人ともにほとんど同様の経験。

- ・実習期間中に外国人看護師と関わることだけが、外国人看護師との協働の不安を軽減する要因ではない。
実習中に毎日1時間カンファレンス実施し学びを共有。
- ・不安の程度が軽減しているのは、実習でのさまざまな経験全てによると考えられる。

・不安の理由

- ・実習前後ともに「言葉」が多い。
 - 言葉の違いが大きな不安の要因となっている。
- 協働の希望では働きたくない理由として言語に関わるものが減少。

⇒言語に関して不安ではあるが、
働きたくないと理由とはならない。

- ・実習後での「緊急時」は不安である場面を示している。
 - その内容から言葉が原因となり緊急時に不安がある。
 - 言葉の不安を軽減することが必要。

- 次に多い言葉実習前後ともに「文化」であった.
 - 王ら(2010)によると, 医療現場では勤務している同僚同士の国民文化および組織文化の相互理解が必要.
 - 「文化」に関する内容より実習前後ともに, 王ら(2010)の述べる国民文化に対して不安.
 - 看護師として外国人看護師と共に働くには, 王ら(2010)も述べるように国民文化と共に, 組織文化の理解も必要.
- ⇒外国人看護師の国民文化の理解と共に, 自らの組織文化の理解も必要である.

3. 外国人看護師との協働における

自己の課題とその理由

- ・実習前後共に多かったのが、「理解」。
→さまざまなことを理解する必要があると考えているため。
- ・実習後:「文化」や「異文化」が多い。
内容:「相手と違うこと(文化的背景だったり, 生活習慣, 考え方など)を受け止めること」, 「語学力, 異文化に関する知識」など。

- 小野ら(2011)によると異文化間能力獲得のために、文化的気づき(文化的感受性)が最も重視されている。
- 小野ら(2011)は文化的気づきは、文化的知識や文化的技能の獲得につながり、看護者の異文化間能力が高まっていくと述べている。
- 実習後の内容より、文化的気づきをしている。
- 文化的知識の必要性を自己の課題と考えている。
⇒ 実習後、小野ら(2011)が述べるように異文化間能力が高まっていくのではないかと推測。

- 実習後と比較し実習前に文章量が少ない
→ 自己の課題を明確化が困難であったためと推測.
- 実習での多くの経験から、研究対象者それぞれが
自分にとって必要なものについて考えられたと推測.
→ 実習後は実習前と比較し文章量が増加し、
内容も変化している.

V 結論

- ・外国人看護師との協働への希望は、外国人看護師と関わることで変化する可能性が高い。
- ・研究対象者は、異文化理解を外国人看護師と協働することにより理解できると考えている。
- ・国際看護論実習という異文化看護の経験が、外国人看護師との協働への不安を軽減している。

- 自己の課題は実習後では，文化という言葉も多い。
文化的気付きから文化的知識を獲得しようとしている。
- 実習前後の文章量の変化から，実習における
経験により，自己の課題が明確化すると考えられる。

VI 引用文献

堀田かおり, 丹野かほる(2008). 外国人看護師受け入れに関する研究—看護職者の外国人看護師との協同に対する意識調査—, (社)日本看護協会看護教育センター(編), 第39回日本看護学会論文集 看護総合2008, 107-109, (株)日本看護協会出版会, 東京.

古川恵美, 瀬戸加奈子, 松本邦美, 長谷川友紀(2012). 経済連携協定(EPA)に基づく外国人候補者受け入れ施設の現状と課題, 日本医療マネジメント学会誌, 12(4), 255-260.

厚生労働省(2012). 第101回看護師国家試験における経済連携協定に基づく外国人看護師候補者の合格者について, 2012年7月18日, 引用
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000267jc.html>

厚生労働省(2011). 経済連携協定(EPA)に基づく外国人看護師候補者の受入れと看護師国家試験の概要について, 2012年7月19日, 引用
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001xy3p-att/2r9852000001xy6o.pdf>

厚生労働省(2012). 日・フィリピン経済連携協定に基づくフィリピン人看護師・介護福祉士候補者の受入れ等について, 2012年7月19日, 引用

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/other07/index.html>

厚生労働省(2012). 日・インドネシア経済連携協定に基づくインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の受入れ等について, 2012年7月18日, 引用

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/other21/index.html>

小野聡子, 山本八千代(2011). 看護者の異文化間能力に関する文献検討, 川崎医療福祉学会誌, 20(2), 507-512.

王麗華, 小林和成, 大野絢子(2010). 外国出身看護師の医療現場における文化的対応に関する研究, 文化看護学会誌, 2(1), 20-26.